

## 明治末期における言語学と人種論の交錯 ——森鷗外・田口卯吉・新村出・藤岡勝二をめぐって

李 凱航\*

### はじめに

本稿は、明治末期における言語学と人種論の交錯の一側面を考察するものである。具体的に言えば、明治時代の名高い思想家・経済学者・歴史家である田口卯吉(字子玉、号鼎軒、1855-1905)は「比較言語学」の研究に基づく「日本人種アリア起源説」を提唱し、社会に大きな波紋を呼んでいた。しかし、田口の説は森鷗外(1862-1922)、新村出(1876-1967)と藤岡勝二(1876-1935)などの若き学者らに厳しい批判をもたらした。表面上では、田口卯吉は学術方法の革新によって人種を研究していたが、実はその人種論は、大日本帝国の対外拡張・侵略の要求を内含している。若手の言語学者としての新村氏と藤岡氏の田口に対する批評は、明治末年知識界の学術専門化を反映しながら、学問と政治と微妙な関係が現れている。

### 一、森鷗外と「鼎軒先生」

森鷗外の日記によると、明治四十四年三月五日に、田口卯吉の息子の文太(1878-?)が森の自宅を訪ね、父親の七回忌を迎えるに当って文章を書いてくれと頼んだことがある。そこで、森は「鼎軒先生」の一文を書き、九日に文太に送った。この文章には、森は田口との幾つかの関係を振り返っている。森は「鼎軒先生には一度もお目に掛かったことがない」と述べ、その理由を以下のように説明している。

私は少壯の頃、暇があれば本ばかり読んでゐたので名家の演説などをもわざわざ聴きに往つたことが殆ど無い、そこで餘所ながら先生のお顔を見る機会をも得ないでしまつた。

田口は、明治時代における最も名高い知識人の一人であったため、若き学生であった森が「鼎軒先生」を尊敬していたことは言うまでもない。前述の追悼文で、森は二つの面から田口の意義を強調していた。一つは、田口の思想はデモクラチイの思想であるということであり、もう一つは田口が「二本の足」の思想家であるということである。

デモクラチイの思想について、森はこのように評価している。

---

\* LI Kaihang 同志社大学グローバル・スタディーズ研究科在籍。本稿は中国国家留学基金の研究成果の一部である。

先生のあらゆる學問上の意見には、デモクラチイの影でないまでも、デモクラチスムの影を印してゐる、それで官學と違ふ、此點から言ふと、鼎軒先生の學問は福澤先生に近い、私は一般の人格の上から、兩先生を軒輊しようとは思はない、併し學問に於いては、鼎軒先生の勝つてゐられる處がある、私はそれが言ひたい。

ここで、森が強調したデモクラチイの思想には特別な意味がある。「鼎軒先生」の執筆のわずかの二月前に「大逆事件」と呼ばれる事件が起こった。つまり、大審院は幸徳秋水(1871-1911)をはじめとする無政府主義者、社会主義者など十一人の「異端分子」に死刑判決を下すという深刻な事件である。思想弾圧とそれによる処刑は明治末年の知識界に大きな影響を与え、知識人たちは、石川啄木のいう「時代閉塞の現状」に直面しており、不安に襲われていた。この時、高官の軍医総監であった森は、田口のデモクラチイの思想を強調した。このことは、森自身の道徳責任感を表した一方、他方では民主思想史における田口の重要性もうかがえるだろう。

また、森は特に田口を「二本の足」の思想家として賛美している。「二本の足」とは、森の近代知識人に対する分け方であり、東・西文化に精通している知識人を指す。それとは逆に、「一本の足」の思想家とは、洋学あるいは国学だけに精通する知識人のことである。森によると、「一本足の學者の意見は偏頗である、偏頗であるから、これを實際に施すとなると差支を生ずる、東洋學者に従へば、保守になり過ぎる、西洋學者に従へば、急激になる」。森は、時代が最も待望する學者は「二本の足」の學者だと述べている。そして彼は、田口を、時代が待望する「二本の足」の學者として捉えた。

先生の重點は西洋文化の地面に落ちてゐた、併し隨分幅廣く股を開いて、東洋文化の地面をも踏んでゐられた、先生は西洋文化の眼を以て東洋文化を觀察して、彼を我に移して、私の足らざる所を、補はうとしてゐられた、先生は此意味に於いて種子を蒔いた人である、併し其苗は苗の儘である、存外生長しない、それは二本足の學者でなくては先生の後繼者となることが出来ないからである、その二本足の學者が容易に出て來ないからである。

以上からわかるように、學問であれ道徳であれ、森は田口に大きな賛美を捧げていた。しかし、思いがけないところで、上に挙げた賛美と正反対に、森は「鼎軒先生」への非常に厳しい批判も残していた。

鼎軒先生がアアリア人種に日本人も屬するといふことを論じた小冊子を出された頃であつた、友人上田敏君が宅の二階に來て、話をしてゐられた、私はふいと思ひ出して、かう云つた、此頃田口卯吉と云ふ人の書いた本を見たが、日本人がアアリア人種だと云ふ論斷がしてある、そしてその理由として擧げてある言語學上の事實が、間口ばかり廣くて手薄である、學者はあんな輕卒な論斷をしては困るぢやないか。

田口の後輩としての森の追悼文を加味すると、それと不調和な批判が見られることは、非常に不自然であるように思われる。森は、田口の「日本人種アリア起源説」から刺激を受けなかったのであれば、先輩である田口の七回忌に彼を偲んだ文章にはその批判を書くべきではなかっただろう。しかし実は、明治三十六年に行われた森の講演「人種哲学梗概」の中で、田口に対する批評が述べられていた。

田口卯吉君は、慥か日本人種がアリア人種だと書いて居られたやうに記憶しますが、私にはわかりませぬ。兎に角私が思ひますには、初め地球中心の天体論が倒れて、次いで人類中心の創世記が潰れたやうに、アリア人種中心の論も、まだ出来たての中に、早くも撼き出しはしますまいか。

明治三十六年の「人種哲学梗概」と明治四十四年の「鼎軒先生」の間には、七年にわたる時間的経過があるが、森が再び田口に批評を加えたのには特別な理由がある。なぜならば、森のドイツ留学（1884-1888）の体験と関わる一方、彼の自然科学者（医者）としての知的背景も影響していることもあるからだ。

## 二、言語学から人種学へ

森は田口を批判する際に、特に彼の「日本人種アリア起源説」の根拠は「言語学上の事実」であるという主張を指摘する。ここから、田口の「言語学上の事実」を検討しておきたい。

明治三十五年、田口は『古代の研究』という著作を発表した。その著作の中に、「日本人種アリア起源説」に関わる二つの論文がある。一つは、明治三十四年四月の史学大会で行われた「國語上より観察したる人種の初代」という講演である。その講演が同月の『史學雜誌』に掲載されるや否や、激しい批判を浴びた。もう一つの論文は、その批判に対する弁解のために書いた「人種の初代の根據地を決するは國語に如くなし」である。この二本の論文が、修正された後に『古代の研究』に収められた。『古代の研究』の「緒言」において、田口は言語学と人種学との関係について、以下のように述べている。

日本人の祖先を尋ねることは、同時に諸人種の系圖を調ぶることとなるなり。この系圖の後半には神話及び歴史ありて稍々其の概要を窺ひ得べしと雖も、前半は、言語、宗教、習慣、遺物等に依りて推斷するの外手段なかるべきなり。故に余は先づ各國の言語に因りて何れの國民が我が日本人種と親近なるやを推斷する。

ここで田口は人種分類の作業を行う際に、まず「國語」を調べた。田口の考えは、西洋のサンスクリット研究からの影響を受けたものと考えられる。田口によれば、「ヨウロッパの博言学者はサンスクリットを研究したるの後、その言葉が自ら使つてゐる言葉と一致し居るに驚き、之を同一語族となし、アリアン語族と稱せり」という。この「ヨウロッパの博言学者」とは誰

を指すかという、田口がそれ以前に行った講演である「古代商業史談」を見ればわかるだろう。

千八百年の初、則ちナポレオン戦争の頃に印度に滞在して居つたアレキサンドル・ハミルトンと云ふ人が印度でサンスクリットを學んで國へ歸らうとした其途中で佛蘭西人の為に捕虜になつた。それが捕虜になつて居る間に佛人のモツシユール・ド・セーヌと云ふ人と、獨逸人のシユーベルと云ふ人と、此の二人にサンスクリットを教えて、此の二人が之を研究して、印度人は今迄違つた人種だと思つたそれが我々の祖先であつたと云ふと言語から發明して、其の以後言語學が發達したやうに見受けられます。

田口が上文で挙げている言語學者イギリス人の Alexander Hamilton (1762 - 1824)、フランス人の Antoine-Léonard de Chézy (1773 - 1832 及びドイツ人の Karl Wilhelm Friedrich Schlegel (1772 - 1829) は、いずれもヨーロッパのサンスクリット研究において大きな功績をのこした學者である。彼らの研究によって、聖書に記載されていないために当時明らかとされていなかった「古代インド」、後に「アーリア」(Aryan) と称されることになる文明が知られることになったのである。そして西洋の言語學者たちは、古代インドで使われていたサンスクリット語と、ラテン語、ギリシア語、ドイツ語、フランス語、ゴート語、ケルト語などの西洋諸言語との類似性を発見することで、これら言語を操る人種の共通の起源を探そうとし始めた。田口から見れば、「ヨーロッパの博言學者は單に單語の血統的關係を以てインドとチャーマニツクとを同一語族となせしのみならず、實に同一人種と斷定せしものなり」という。

そして、西洋學者は新しい言語學を基準に、世界の人種を三つに分けた。即ち、「アリヤン人種」、「チュラニヤン人種」と「セミチツク人種」である。田口によれば、「アリヤン人種は印度からペルシヤに亘り、それから歐羅巴なる希臘、羅馬、伊太利、佛蘭西、日耳曼、露西亞、諾威、西班牙、英吉利は皆なアリヤンと云ふのである、同じ種類の言葉より成つて居る。」

セミチツクというのは、「今日の亜拉比亞人、それから今残つて居る猶太人、アビシニヤ人もセミチツクださうでございます、是れなどが先づセミチツクになつて居る」。

チュラニヤン人種については、「言語學者自身に於ても大變不完全」で、田口はまるで「一箇の合財囊」のように、「前のセミチツクもアリヤンにも屬せぬものを此の中に入れた」と考えた。例えば、「日本人はチュラニヤンの中に這入つて居る、支那も土耳其も、馬來人種も、カナカ人種も、阿弗利加も、南北の亜米利加人種も、此のチュラニヤン人種の中に這入つて居ります」。

このように言語による人種の分類は、決して平等な關係ではない。例えば、先に挙げた Schlegel は、セミチツク族の言葉を「膠着的で、審美的ではなく、機械的な言語」とし、そして「彼らは異質の、劣つた、後進的な人間であつた」と攻撃している。他方では、アーリア文明の起源と見られるインドについて、Schlegel は「すべてが、まったくすべてがインドに端を發している」と高く評価している。言語學による人種學的な分類はすでに優劣をつけた。その示唆を与えら

れた田口は、日本人とアーリア人種との近縁性を強調するようになった。

### 三、田口卯吉における「日本人種論」の展開

#### 01. 「日本人種アーリア起源説」

田口は言語と人種差別は固く結びつけられている影響を受け入れたからこそ、日本語と印欧語族との比較を通して、日本人をアーリア人種に属させるための作業を始めた。西洋人が日本語をハンガリー、トルコ、満州、蒙古などの言語と一緒にチュラニヤン語に属させているのに対し、田口は『古代の研究』で、マレー、南洋（カロリン群島のルック語）、アメリカの土人、アラスカのエスキモー、朝鮮、満州、蒙古、ペルシア、チベット、トルコ、ハンガリー、バスクなどの言語の文法を調べたうえで、日本語はこれらの諸言語とは違うため、西洋人は誤っていると指摘している。

そして田口は、サンスクリットとギリシア、ラテン、ペルシア、トルコ、ハンガリーの諸言語と日本語の動詞及び形容詞の語尾の変化を比較し、「文法に於いてラテン、ギリキ、サンスクリットとヨウロツパ諸國との間に此の如き相違あり」とし、「アリヤン語族の根本たる以上諸國の文法も我が日本の文法に類シヨウロツパ諸國と異なるもを見るべし」と断言した。それゆえ、田口は西洋の言語学者たちを批判した。

今や自らアリヤン人種と稱して、我々をチュラニヤンと稱するは、我々祖先を横取りして、我々を末家筋に貶すものと云わざるを得ざる也。（中略）之を自己の祖先と爲すに至りてはその誤謬を表白せざるべからず。

しかしその一方では、田口は「余は實に博言學者がサンスクリットとラテン、ギリキとの關係の開發したるの勞を謝す」と、西洋の学者に謝辞をも捧げた。

ここからわかるように、田口には、「人種」分類の手法としての「比較言語学」自身に対する疑問はないようだ。むしろ田口にとっての最大の問題となったのは、日本人は果して優越性を帯びるアーリア人種に属するかどうかということであるそのため、田口は西洋人によって進められてきた単語で人種を決めるという方法を批判しながらも、その一方では同じ手法を用いて、日本語とサンスクリット語の類似性を指摘し、日本人がアーリア人種の末裔である主張する。田口にとって、言語学の分析による、理想的な人種分類の図式は以下である。

余は昔カウカサス山の北に居リシスキテン人種、即ちシシヤン人若くはペルシアの北に居リシチュラニヤン人種は、今日のトルコ、ホンガリーの如き語法を用ひたる人種にあらずして、却てロシヤ若くはゼルマン風の語法を用ひたる人種なりしならんと思ふ。トルコ、ホンガリーは元來中央アジヤ若くは東方アジヤに居リシ人種にて、カウカサス山の北に居リしものはロシヤ若くはゼルマン人種の祖先なり。

つまり田口は、カウカサス山脈の北部に居住するスキテン人種の言語を、ロシアとゲルマンの諸言語に近いと考え、チュラニヤン人種を代表するスキテン人をロシア人やゲルマン人の祖先だと整理したのである。それで、「日本の文法と全く同一」であるトルコ語はチュラニヤン語族と正反対だと田口は考える。

元来トルコ人、ハンガリー人は中央アジアに於てサンスクリットを用ひたるアリヤン人、チベット人等と同居して居りし者なるを以て其語法が斯くの如く似て居るなり。(中略) トルコ、サンスクリット等の文法は日本文法々中に無疵に存生して居るを以て、我々はヨウロッパ人に比すれば本家筋に近きものと云はざるべからず。

ここからわかるように、田口はまずアリア語族に属するトルコ語をと、チュラニヤン語族に属するゲルマン語やロシア語とを差異化する。次に、日本語とトルコ語との近縁性を強調する。最後に、日本語をトルコ語やサンスクリット語をはじめとするアリア語族に属させるべきだと唱えている。もし、日本語がアリア語族の一つであれば、日本人の祖先も勿論アリア人であったはずである。

## 02. 人種論と「愛国心」

「日本人種アリア起源説」を提出した最初の講演で、田口は自身の比較言語学研究はまだ不十分であると告白していたが、なぜかたくなに言語学をもとに「日本人種アリア起源説」を唱えたのだろうか？

田口親は、「卯吉の思想の性格を理解する上で重要な手掛かりになるように思われる、(中略) 卯吉の史論、文明論全体との関係について考える必要」と指摘するが、具体的な説明は残されていない。武藤秀太郎は田口親の見解を踏襲し、さらに「人種は田口の思想全体を貫くキーコンセプトであり、植民論や内地雑居論など多くの主張は、彼独自の人種観を基礎に展開されている」と強調した。

しかし、ここで問題となるのは、もともと田口は日本人種がアリア起源ではなく、匈奴起源だと唱えていたことだ。明治二十八年四月の「日本人種論」に、田口は以下のように述べている。

要するに言語風俗其他に就いて観察するときは、我日本人種は匈奴人種の一族たるを疑ふべからざる也、現時亜細亜北部には尚ほ矇昧野蠻にして其容貌亦粗末なるものなきにあらずと雖も、苟も我日本人種は其最も發達開進したるものにして、土爾基匈牙利も亦我日本の同胞たることを思へば、我日本人種たるもの豈に相提携して世界に立つことを思はざるべけんや。

そして十年後、即ち明治三十八年になると、田口は自身の人種論の転換について、以下の解釈を残している。

私は先づ日本人は匈奴人種の一つでありますと思ひます。匈奴と云ふと下等の人種のやうに思はれるかも知れませぬが、匈奴は現今の匈牙利で良い國民である。羅馬の史家はヒュンと云へば、鼻が低くて眼が凹んで妙な人種のやうに書いてありますが、今日歐羅巴で威張つて居るホンガリーは白い美しい人種である。ホンガリーは冒頓單于の子孫が歐洲に行つたのであらうと思ひます。（中略）此匈奴は今日の言語學者の研究程度に就ては「チュウラニヤン」語族に屬して居りますが、實は「アリヤン」人種で、私は印度、波斯、トルコスタンあたりから北方に蔓延して支那の匈奴になつたので、前漢の初に其事件が起つて日本に御渡りになる様になつた譯ではないかと思ひます。

ここで田口が匈奴人種もアーリア人種の一つであるという主張を行ったことで、彼の人種論が変化したことがわかる。この点については、明治二十八年の論文では一言も言及がない。しかし、武藤秀太郎はその変化を無視して、「田口の場合は、日本人の起源に関する純粋な学問的関心があった一方で、最終的にアーリアン人種説へと至る主張には、その時々中国大陸をめぐる状態認識が、強く反映されていたように考えられるのである」と結論付けた。この結論には、本稿は以下の二つの問題を指摘したい。

一つ目は、本稿の第四節に登場する若手言語学者からすれば、田口の学問だけではなく、その倫理観さえ怪しいと思われていることである。「純粋な学問的関心」というのは、全くありえないものである。そしてふたつめには、武藤は田口の「中国認識」を論じる時に、田口の青年時代の代表作『支那開化小史』（1882-88）を徹底的に無視している。『支那開化小史』は『日本開化小史』（1877-1882）とともに、田口の文明史観の代表作と見られ、これまでも高く評価されている。『支那開化小史』は田口の「中国認識」の基礎とも言えるだろう。『支那開化小史』を離れて田口の「中国認識」を論じるのは考えにくい。そのため、武藤は田口の「中国認識」を論じる際に、田口の中国に対する矛盾を抱えた見方を避けたのである。

要するに、田口の中国認識は、福澤諭吉をはじめとする明治知識人と同じく、中国はいわゆる「亜細亜の悪友」であり、文明的で進歩的なヨーロッパ諸国に比べると、中国は野蛮と停滞の専制国家というものであった。田口はこのように中国の歴史を総括している。

周より以前數千年間は封建亂離の禍害に埋没したる時代なり。秦より以後二千餘年は専制政治の腐敗に沈淪したる時代なり。支那國の人民は未だ嘗て此弊害を豫防するの制度を發見するに至らざりき、封建亂離の禍害耐ふべからざるに及びて之を一掃するものは専制政治是なり、専制政治の腐敗耐ふべからざるに及びて之を一掃するものは叛亂分裂是なり、支那國人民の歴史は此數事を反復したるに過ぎず。

ここで田口は中国の歴史を強く批判する一方、日本国内において外国人に内地居住権を与えるべきかどうかについての論争には、中国及び朝鮮半島の日本帰化の先例を援引し、外国人内

地居住禁止の法令を撤廃すべきだと主張している。中国に対する極端な消極的なイメージを持っているといえ、田口はなぜ中国と朝鮮を例として、内地開放を主張するのか？ここから見れば、田口の人種論と中国認識はそれほど関係ないように思われる。

それでは、田口の人種論の根拠となったのは何だったのだろうか？

明治三十八年二月、日露戦争の勝利の直前、田口の死去のわずか二月前に、彼が史学会の最後の講演「日本人種の研究」で、自身の人種論の根拠を披露したように思われる。田口によると、ヨーロッパ人は日本人を南洋諸島の野蛮人のように見ている。しかし、日本は「小さい島に居りながら大なる支那帝國に打勝ち、又露西亞と云ふやうな世界の第一等強國と戦つても連戦連捷して居る、此は奇妙の人種であると云ふ疑は確かに歐米人の間に起つて居る」。日本人は果たして南洋諸島と同じ人種であるのか？田口によれば、日本人はヨーロッパの科学と文明を十分に学び、ロシアに勝つことを通して、アリア人種のヨーロッパ人にも勝つことができるという証明である。田口は、ヨーロッパ数百年の文明の累積を、日本はわずか半世紀だけで消化し、成功を収めることができた秘密は、明治維新にあると考えている。特にヨーロッパ人に注意を促し、もし明治維新の歴史を研究すれば、ヨーロッパ人はさらに驚くかもしれないとも考えた。なぜなら明治維新はヨーロッパの革命とは違い、「民権」のためではなくて、「愛国心」によるものであったからだという。

つまり、田口は日本人種の地位を決めた明治維新が日本人種の愛国心によるものだと考えたのだ。したがって田口の日本人種に対する認識は、全くこの「愛国心」をもとにしたものであったのだ。

田口が「日本人種匈奴起源説」を提出した提唱は、日清戦争勝利後に日本政府が実際に行った台湾、遼東半島の割譲要求とは異なり、中国の東北三省、即ち後の傀儡国家である満州国を割譲すべきだと唱えていたからである。田口からすれば、もし日本人が匈奴人種起源であれば、日本人の東北三省の割譲要求は、歴史的な根拠があると思ったのだろう。田口の人種論は、国家の植民地利益と関わっている。

田口の外国人の内地居留禁止法令撤廃を唱えた理由は、欧米の資本が内地に入ることによって資源が開発され、雇用機会も増え、日本にとって利益になると考えたからであった。「嗚呼居留地の制をして久しく行はしめば、余は外國貿易の隆盛決して期すべからざるを見るなり」と田口は述べている。田口の内地居留論は、明らかな経済利益の要求であり、人種との関係は薄いと思われる。

明治三十七年、日露戦争の勃発の直後、田口は『破黄禍論：一名・日本人種の真相』を著した。西洋人による日本人を黄禍とする避難に対して、田口はむしろ白人のロシア人こそが黄禍であるはずだと言う。田口の根拠はロシアの言語ではなくて、血縁にある。田口によれば、ロシア人はかつて蒙古人に征服された歴史があり、その貴族の多くは蒙古人と通婚しており、今でもロシア人の血には蒙古人の血が流れているからだというのである。



明治三十八年の「日本人種の研究」で田口は、言語学研究による「日本人種アリア起源説」が若手の言語学者に強く批判されたのを受けて、人種論を修正した。

我々祖先はがどう云ふ風に歩いてお出になつたかと云ふことを調べるには、祖先の遺物を講究するより仕方はない。

田口は直ちに日本の古墳を研究して、意味深い結論を結んでいる。

元來大加羅任那邊は新羅と同じ様に日本の植民地でありますから、勿論交通して居つたに相違ないが、併し此邊には青琅玕は産せぬのである。去れば青琅玕の出産する國をも我々の祖先が通つて「あゝ良い物があつた」と云ふので、此を持つて朝鮮南部にお出になつたのでないか。是は私は遺物から研究したのである。

田口は明言こそしなかったが、その意味を読み取ることは難しくない。田口は、既に日露戦争後に日韓合併の歴史的な根拠を探しはじめた。日露戦争の勃発の直後、田口は「韓国の獨立を尊重すべし」（明治三十七年四月）を書き、日清戦争と日露戦争の原因は中国とロシアが朝鮮半島の獨立を脅威と考えたのである。日本にとって、この二度の戦争の目的は朝鮮半島の獨立を守ることだという。また田口は朝鮮政府が日本国民にも土地所有権を与えるべきだと積極的に主張している。同年八月に書いた「韓国の經濟問題」で、田口は再び韓国の「荒蕪地」の所有権の問題を強調したほか、さらに韓国の貨幣は日本圓を本位とすべきだと唱えている。「余輩は日本政府が此點に於ては十分に強硬政策を採るの至當なるを見るなり」。ここで、田口の韓国に対する野望は一目瞭然であろう。

ここまで見てきたように、田口の人種論の基礎となつたのは文明論でもなく、また「中国認識」でもなく、彼自身の講演で言及した「愛国心」である。その「愛国心」というのは、日本帝国の膨張の各階段に、田口の貢献した理論資源を指すのだろう。田口は言語学、考古学といった新しい学術方法で帝国主義の合法性を論証しようとしたが、新村出をはじめとする若手研究者の厳しい批判を浴びたのである。

#### 四、新村出と藤岡勝二の批評

##### 01. 論争の経緯について

新村出は山口県出身、東京帝国大学文科大学博言学科卒業、上田萬年（1867 - 1937）に師事し、後に京都大学の教授・名誉教授となり、一九五六年に文化勲章を受賞し、また『広辞苑』の編集者としても名高い言語学者である。

藤岡勝二は一八七六年、京都市に生まれ、新村出と同じく、東京帝国大学文科大学博言学科卒業した。ドイツ留学派遣を経て、東京帝国大学の教授となり、上田萬年に続き、言語学講座教授に務めていた。

田口の「國語上より観察したる人種の初代」が明治三十四年六月号の『史學雜誌』に掲載された頃、新村は東京帝国大学から卒業したばかりで、国語研究室の助手を勤めていた。この田口の言語学に関する論文について、新村は専門的な角度から批判を加えている。田口の文章を読んだ新村は、七月号の『言語学雑誌』に「田口博士の言語に関する所論を読む」を寄稿し、田口の論文において「根本の知識」はないと批判した。同論文の中で新村は、「科学上寸毫の価値なく、又学問上の徳義に於て欠けある」とし、さらに「其誤謬は根底からの誤謬、全体の誤謬であつて、少々どころの誤謬ではない」という酷評を下している。

藤岡も九月号の『史學雜誌』に「言語を以て直に人種の異同を判ずること」を寄稿し、田口の西洋の言語学の知識を質疑し、さらに「まづ手元の國語の研究から進んで而して後に他國の語と比較をして頂きたい」と勧めた。

そして新村と藤岡の非難を浴びた田口は、「人種の初代の根據地を決するは國語に如くなし」という論文を書き、『史學雜誌』十月号に寄稿し弁明した。この論文の中で田口は、「二君が一種奇異なる語法を用ひて人をして悪感を起こしむるに長せることを知り流石に博言語學者たるに感せり」と反論した。

さらにこの論文を読んだ新村は、『史學雜誌』十一月号で、自分の批評は「正々堂々」で、「(田口)博士の論拠がいかにも奇怪で、一笑に附し去るべき点が多いにせよ、お答え致さないも失礼と存じますから」と言いながら、「田口博士に答えて言語学の立脚地を明にす」という論文を書き、「弁明」を披露した。

## 02. 田口の「根底からの誤謬」

新村は、田口の論文を「根底からの誤謬」だと一貫して非難し続けた。その「根底からの誤謬」は、「比較言語学」は一体何を意味するというものである。新村によると、「諸言語の歴史的關係を見出すのが、比較言語学の本旨であつて、単に抽象的に各国語の異同を研究するのはわけが違ふ。つまり言語の系図を調べるのが目的である。単に表面上の似寄りでなく、血統的關係、親族的の關係を探求するのである」。

続いて、新村は言語学の研究方法を説明する。

第一、その類似はいかなる点に於てであるか、第二、其類似点を以て其等の国語間に深い關係がある証拠となすに足るかを極めた上に、始めて其關係が親族的歴史的なものであつて、偶然な又は自然な類似でないかと否とが判明する。(中略) 尚ほ進んで、同一語族諸分派親疎の度合ひ、同族諸分派の根原語、及び根原語よりいかにして分支せしかの事情をも研究せねばならぬ。更に其一語族が他の一語族と系統を引いてをるかをさがし、総合に総合を重ね、段々大なる総括をなし。

ここで、新村が田口に注意したのは、諸言語間の「親族的」、「歴史的」な關係を通じて「言

語の系図」を探ることが、比較言語学の最も重要な作業であるということであった。田口の論述について、新村はさらに以下三点の間違いを指摘している。

ひとつ目に、サンスクリット語を始めとする諸言語の比較において田口は、「人称語尾と人代名詞とを混同したり、一個独立の語詞と語根、語幹、語尾などとの区別を無視し」ており、新村が見るところ、田口には「全く印欧語動詞の組織」に関する知識が無いように思ったようである。

ふたつ目に、日本語の「て、に、は」は、サンスクリット語などの諸言語のように、名詞の後に語尾を付ける点で共通しており、日本語との関係性を指摘したことである。

そして三つめに、「語詞配列の順序」についてである。つまり主格、物体格、動詞を置く場所によって言語の親縁関係を定めることである。

また、藤岡も、言語により人種が決まるという田口の言語学に疑問を呈した。例えば、田口に繰り返し引用されたマクス・ミュラー（Friedrich Max Müller, 1823 – 1900）の名言“language is thicker than blood”（「國語は血より濃なり」）に対して、藤岡は「最初の意は言語の分類をすることについてで有ったので、それですぐ人種を説くつもりではなかったらしい」と指摘する。そして、藤岡はミュラーのブンゼン氏(Bunsen)宛ての書簡における“*It is impossible to imagine that ethnological race and linguistic race should continue to run parallel*”という一節を証拠として挙げ、ミュラー自身も言語学による人種の分類に否定した。

このような新村と藤岡の批評を受け、田口は反論した。新村の言語学の定義について、田口は「新村君の一私言」とし、西洋言語学者ポップ（Franz Bopp, 1791 – 1867）、ミュラーなどの著書からすれば、比較言語学は「決して単に言語の系図のみを調べるもの」ではなく、また藤岡は「西洋の博言学者は単語の歴史的関係のみを以てありやん語族を定めたり」と述べた。

田口の論文は殆ど新村や藤岡のその言語学への質疑を避け、人種分類だけに注目していた。そのため、新村は第二回の論文に言語学的な問題への答弁を再度要求した。つまり、田口の「印欧語の比較に於て、声音論と語形論とを無視された理由」と「措辞法の一致を以て、言語族編成を根拠とする理由」についてである。

実は、これは田口の答えられない問題だった。田口の最初の講演である「國語上より観察したる人種の初代」で明言したように、「是までに調査するに就いては、随分勉強したのでありますから少々の誤謬に対しては手厳しき攻撃を加へられぬように」と懇願している。新村はこれを「愛嬌のことわり」と見なし、田口の学問に対する倫理観に対しても疑問を呈した。この新村の見方は、森の「鼎軒先生」における批判と異口同音ともいえるだろう。

### 03. 学問の制度化と専門化

田口と新村の論争は、最後に何らの成果も残せずに終わってしまった。表面上は、言語学の領域における若手研究者としての、田口の新しい挑戦ではあった。実は、これは明治前期の啓

蒙時代に活躍していた田口の百科全書式の思想体系が、新時代の学問の制度化と専門化に適合できなかったことに通じているのである。田口は言語学の領域のみならず、歴史学や経済学の領域においても、さまざまな新しい課題に直面していた。

「言語学の論争」の場合、新村は煩わしさを厭わず、田口に対し言語学の概念を規定して議論し、言語学研究の専門化を繰り返し強調していた。例えば、新村は論文中にほとんど「私」を使わずに、却って「吾々は何々を思う」のような文体を多用した。

言語学者が言語を単語の意に用ゐることは吾々の全く知らぬ所であります、史学者はさういふ語義に使ふこともあるやようです。

最後に博士の所謂言語学とはいかなる科学をさすのであるか、よくわかりかねますが、もし philology, science of language, Sprachwissenschaft の義ならば、吾々が所謂言語学と同一であるとみておきます。

その「吾々」という表現は決して偶然的なものではなく、明白な自他意識、すなわち歴史家と言語学者の領域をはっきりと区分する学問態度を含んでいた。新村の次の話は、歴史学と言語学の差異を、さらに顕著にしたと思われる。

本誌の前号に、田口博士の高論と相並んで掲げられました坪井博士の「言語と史学」の、言語といふ名称も、その場合には単語を指されたやように見えます。之に反して、吾々は言語といふ名を、広く解釈して、Language, Sprache の意味にとつてゐるので、又は国語といへば、コンクリートな意味の言語をさすと考へてゐるのです。単に単語といへば、どの国、どの民族の所用と限らないアブストラクトな意味に使ひます。

ここで取り上げた「坪井博士」は坪井九馬三(1859-1936)であり、田口と同様、安政年間に生まれ、新村が卒業した東京帝国大学文科大学の教授で、歴史、地理、言語学等さまざまな分野で活躍した学者である。ここから分かるように、新村の批評対象は田口ばかりではなく、田口をはじめとする旧学風すなわち啓蒙期の百科全書式の「学問」である。東京帝国大学博言学科教育制度下で専門指導を受けた新村にとって、田口の文章に対する、「所論が前後不揃であり、用語は曖昧、論拠の筋路は不整であつて其主旨が、補足し難く」という批評は適切であろう。

戦後活躍した経済学者土屋喬雄(1896-1988)に、福沢諭吉と「雁行する地位を有する」と評価された田口が、死後急速に忘れ去られていった理由も、おそらく学問の専門化に関わっているだろう。河野有理氏は、田口と福沢諭吉の死後の影響力のコントラストについて、このように述べている。

(田口は)福沢のように大学を経営し、弟子を養成し、各地にいわゆる「山脈」をつくることはしなかったという事情はもちろんある。だがそれだけではあるまい。彼の活動

の多様性も一因であろう。「革命後の社会は百事草創に属す、一事に専らなる能はざる」を座右の銘としたというその活動は事実多岐を極めた。彼は東京府会、東京市会また衆議院にそれぞれ議席を有していた。彼は歴史家であり、また『日本社会事彙』、『大日本人辞書』の編集者であり、『国史大系』、『群書類従』、『徳川実紀』の刊行者でもあった。経済学者であり、同時に企業家、実業家、経営者だった（両毛鉄道、東京株式取引所）。

こうした活動の多彩さは、それ自体が同世代中においても群を抜く、彼の際立った特徴といえる。にもかかわらずそれはともすれば「啓蒙」期におなじみのある「百科全書」的な特質として、彼が冷笑される原因にもなった。彼の死後、専門分化した各学問領域が、それらの分野が当時相互に有していた関連や、理論と実践の統合を背景で支えていた強烈な価値意識を捨象した上で、彼が各分野であげたそれぞれの業績に、各学問の枠組みにそった学史的な位置づけを与えることに腐心してきたという事情が、そこには働いていたのだろう。こうした努力が、田口を言ってみれば学史上の祭壇における体のいい藁人形にしまったのである。

河野有理氏の解説は、田口・新村論争の場合にも当てはまると思われる。ただし、その「アマチュアリズム」という「冷笑」は死後生じたものではなく、晩年の田口もその困難に直面していた。田口は相変わらず「啓蒙家」のような口ぶりであり、言語学から人種学へ越境した時、新村は相当の懐疑を表した。

田口は新村出と藤岡勝二の批判を読んだ後、「人種の初代の根據地を決するは國語に如くなし」を書き、強硬な態度で「日本人種アーリア起源説」を堅持した。しかし三年後、人生の最後の講演である「日本人種の研究」において、田口の立場が後退したのは疑いない。

此前の史学会に於て言語の上から日本の人種のことを御話したら、言語學者の非常の御立腹で恐縮しましたが、(中略)茲に此日本人種と云ふものはどんな人種であるか。是は逆も一朝一夕で研究し終はれるではない。

このような田口の一文が、新村出や藤岡勝二との言語学論争における気まずい終わり方だと評価されても仕方ないだろう。

## 結論

田口卯吉の人種論の提起と変遷は、ちょうど日本帝国が日清戦争と日露戦争を経験し、東アジアの大国から世界の大国へ変貌した時期と噛み合っている。この歴史の過程において、田口の人種論は、日本帝国の理論的資源の役割を果たしている。それゆえ、田口の人種論は、特定の学術原理あるいはいわゆる「中国認識」を基礎としたものではなく、日本帝国の膨張の各段階の具体的国策に伴って変わっている。それこそが、田口のいわゆる「愛国心」となったものである。

戦後の歴史家大島清は、田口が「老耄の域にたった」としか言えないと弁護した。しかし、日本帝国の拡張という観点から田口の人種論を考察すれば、田口は学者として「老耄の域にたった」というより、逆に非常に巧みな帝国主義者だったのではないか。だからこそ、田口の人種論は、提出されるや否や、真面目な研究者である新村出、藤岡勝二などの学者から批判を加えられたのである。彼らの批判は、純粋な学問的関心を体現する一方、明治維新前後の二つの世代の知識人をめぐる知識と認識の隔たりを反映していた。

#### 参考文献

##### 日本語文献

- 木下杢太郎主編 (1971-1975) 『鷗外全集』第25 26 35巻 岩波書店  
 鼎軒田口卯吉全集刊行会編輯 (1990) 『鼎軒田口卯吉全集』(復刻) 第2 第5巻吉川弘文館  
 石川啄木 (1967-1968) 『啄木全集』第4巻 筑摩書房  
 田口親 (2000) 『田口卯吉』 吉川弘文館  
 河野有理 (2013) 『田口卯吉の夢』 慶應義塾大学出版会  
 新村出 (1971) 『新村出全集』第1巻 筑摩書房  
 大島清、加藤俊彦、大内力 (1983) 『人物・日本資本主義：明治のイデオログ』 東京大学出版会  
 武藤秀太郎 (2003) 「田口卯吉の日本人種起源論 - その変遷と中国認識」、『日本経済思想史研究』3, 47-64  
 田口卯吉 (1901) 「國語上より観察したる人種の初代」『史學雜誌』4  
     「人種の初代の根據地を決するは國語に如くなし」『史學雜誌』10  
 藤岡勝二 (1901) 「言語を以て直ちに人種の異動を判ずること」『史學雜誌』09

##### 訳本

- E. W. サイド、今沢紀子訳 (1986) 『オリエンタリズム』 平凡社  
 レオン・ポリアコフ アーリア主義研究会訳 (1971) 『アーリア神話：ヨーロッパにおける人種主義と民族主義の源泉』 法政大学出版局

##### 英語文献

- Rosane Rocher, *Alexander Hamilton, 1762-1824: a chapter in the early history of Sanskrit philology* (New Haven : American Oriental Society, 1968)  
 Stefan Arvidsson, Sonia Wichmann, *Translated, Aryan Idols: Indo-European Mythology as Ideology and Science* (Chicago: University Of Chicago Press, 2006)  
 Trautmann, *Aryans and British India* (Delhi: Yoda Press, 2006)  
 Sara Eigen, eds., *The German invention of race* (New York: State University of New York Press, 2006)